

点も言及したということでございます。  
○筆坂秀世君 それじゃ、私の方から言います。

要するに、大西さんたちを出席させる気なら事態切迫とは言わないですね。淡々と受付すれば、登録してもらえばいいだけの話です。しかし、これは出席させたくないという圧力が鈴木議員から掛かっていたと。だから、このままだったらこれは大変なことになる、出席させるつもりだったのが出席させられなくなる、だから急いで鈴木さんに説明に行けと、そして何とか出席の了解を鈴木さんから取ってこいと、ありていに言えば、そういう趣旨であなたは大西さんに電話されたわけでしょう。どこが間違っていますか。

○政府参考人(重家俊範君) お答え申し上げます。

そういうことではございません。先ほど申し上げましたように、アフガニスタンという治安情勢の悪いところにあります、NGOと政府との関係がうまく連携されていることが重要であります。特にカブールには治安維持部隊などが展開しておりますし、ブラヒミ国連特使もアフガニスタンで活動しているNGOは国連としても把握しておきたいと、そういうようなこととございますので、そういう連携を維持していくことが重要であると、そのためにはやはりお互いの信頼関係が重要であるというふうに思っていたわけでありまして、十八日の朝日新聞にいろんなことが出ておりまして、そういう意味で私も、お互いの信頼関係を少し揺らいでいた、そういうことで参加問題を考えあぐねていたと、そういうことでございます。

○筆坂秀世君 だから、結局、何で鈴木議員に説明に行つたのかということはある正直に言わないわけですよ、言えないわけですよ。

逆に言えば、これ聞いてわかれますよ、いかに鈴木議員というのが、鈴木宗男議員というのが外務省に対して影響力を持っているか。しかし、外務大臣じゃないですよ、自民党の対外経済

協力委員長が知らないけれども、一人の政治家じゃありませんか。それを外務省が何かあれば鈴木さんに説明に行く、何たる卑屈な外交かと私言いたいと思うんです。

実はそれだけじゃないんですよ。例えば野上次官も、私は事実上鈴木さんの圧力を国会で認めていると思うんです。例えば、二十日夜のレセプションでNGOの出席が拒否されたことを知った田中外務大臣は、翌二十一日昼前、野上さんと呼んで、これは一体どうなっているんだということを出席させるように指示されていますよね。そのときに、田中さんは次官に職を賭してやれというふうにおっしゃっているんです。

しかし、私聞きたいんですけれども、出席を決めたのはこの判断で決めたんですか、出席拒否を決めたのはこの判断で決めたんですか。

○政府参考人(重家俊範君) 最初に出席不許可といいますが、そういうことを決めたのは、外務省の事務当局で決めたわけでございます。その後、大臣の御指示もありまして、更に検討した結果、二十二日の閉会セッションにはオブザーバーとして出席していただく、ほかのNGOと一緒に出席していただくという決定を行ったわけでございます。

この間、いろんなことを心配してくださる方々の御助力、御尽力や、私どもも実際に大西さんたちと話したということもございまして、そういう信頼を回復するための直接、間接の努力もしていった、こういうこととございます。

○筆坂秀世君 奇怪な話なんです。NGOの出席拒否は外務省の事務当局の判断で決めたんです。今度、出席させようというのに、何で職を賭してやらなきゃいけないんですか。簡単な話で、事務次官が出席拒否と決めたんだから、ああ、やっぱり出席させよう。簡単にできることですよ。ところが、田中外務大臣は職を賭して出席させるというふうに言っている。そして国会へ出てきた野上次官は何と言っているか。経緯もあるようだから、難しいかもしれないがやってみようとお答えしました。田中外務大臣は違うんです。野上次官は、鈴木氏は難しい、前からの経緯々々と。野上さんは鈴木さんの名前だけを外しているんです。しかし、それにしても、前からの経緯があるもので難しい。何で難しいんですか。自分が決めたことを自分ですぐ取り消せばいいことじゃないですか。こんなばかな話がありますか。

総理、これはどう考えたっておかしいじゃありませんか。野上次官の方がうそを言っている、こゝう言わざるを得ないでしょう。

○内閣総理大臣(小泉純一郎君) おかしいから出席させたいでしょう。それでいいじゃないですか。

○委員長(真鍋賢二君) 筆坂秀世君、時間が参りました。

○筆坂秀世君 総理、本当にこの問題の事の重要性を分かっている。だって、政治家が介入して国の外交がねじ曲げられて、それで良しとする、そんな小泉内閣に、私、日本の外交を担う資格はないということと言わざるを得ない。

引き続きこの問題は徹底究明するということをお願いして、私の質問を終わりたいと思います。

○委員長(真鍋賢二君) 以上で筆坂秀世君の質疑は終了いたしました。(拍手)

○委員長(真鍋賢二君) 次に、平野貞夫君の質疑を行います。平野貞夫君。

○平野貞夫君 国会改革連絡会所属で自由党の平野でございます。

質問に入る直前に是非小泉総理に確認してほしいという話がありましたので、それから入ります。

朝から話題になっております鈴木宗男さんが、田中外務大臣の後任に緒方貞子さんを盛んに小泉総理に推薦といいますが働き掛けているというかなり確度の高い情報が入つたんですが、それは事実でございますか。鈴木宗男さんが総理に、田中外務大臣の後任に緒方貞子さんをするように働き掛けているという話が私のところに入つたんですが、それは事実でしょうか。

○内閣総理大臣(小泉純一郎君) 全くそうです。初耳です。

○平野貞夫君 分かりました。かなり私のところには確度の高い話ですが、まあ、これはちょっと様子を見ましょう。

官房長官、御苦勞さんですが、何回か御答弁なさっていますが、田中外務大臣の更迭について、未明ですが、未明から朝にかけてどういうプロセスで更迭手続が行われたか、ちょっと御説明いただきたいと思つています。

○国務大臣(福田康夫君) 昨晩の夜十一時五十分ぐらいだったと思つていますが、外務大臣に総理官邸においてをいただいた、総理が呼び出したわけでございます。そこで総理から進退について話がございます。そして田中大臣はそれを了承された、こういうことになりました。

そして、今朝八時二十分でしたか、ちよつと待つて下さい、八時二十分に持ち回り閣議を経た上で、陛下の認証行為により依願免の法的効力が確定をいたしました。

この依願免の場合の書面が出ているかどうかといったようなことがいろいろ問題になっておりますけれども、これは田中大臣は書面は提出していません。おりませんが、願いがあつたかどうかを確認するものがこの依願免の場合の書面でございますけれども、こういうことになっております。

○平野貞夫君 確認しますと、総理から辞めるよう勧められたこと、それから辞表は出してないということ、それから依願免職で行われたということだと思つますが、今日の回り持ち閣議で田中外務大臣は署名していますか。

○国務大臣(福田康夫君) 持ち回り閣議の場合にお辞めになる方の署名は通常要らないことになっております。

○平野貞夫君 していないということですね。私は、この更迭の手続に重大な憲法上の疑義が

あるということを総理並びに国民の皆さんに申し上げたい。

と申しますのは、田中外務大臣自身はこのように話しているんですよ。今朝、官邸から八時までに辞職願を出してくれとの連絡があったが、罷免を選ぶか依願免を選ぶか、政治家としては非常に重大なポイントであると。したがって、ちよつと考えたいということで辞表を出さない。そういう状況の中でこういう手続が行われたと。

これは罷免したんじゃないんですか、総理。  
○国務大臣(福田康夫君) これは、昨晚十一時五十分からの総理と田中大臣の会話の中で、田中大臣が総理の要請、要請と申しますか協力要請ですね、について、これを了承されたわけでございます。分かりましたということも申されて、さらに、お世話になりましたという言葉も申されたわけでございます。私は大変深い対応をされたということに思っています。

○平野貞夫君 しかし、田中外務大臣自身が罷免を選ぶか依願免かということで悩んでおられるということじゃないですか、本人自身が。今日言つて、マスコミに載っていますよ。

それじゃ、この田中外相のケース、いわゆる辞表を出さずに依願免を取った例、ございますか、閣僚の更迭で。

○国務大臣(福田康夫君) それは調べてみないと分かりませんが、これは辞意を表明すると申しますか、それに合意をされた。この意思表示が大事なことです。それを確認する意味で署名を取るといふようなことはございますけれども、この確認の署名は必須条件ではないというふうに申し上げたのは先ほどのことでございます。

○平野貞夫君 法律の解釈としてそういう解釈が一つあると思いますよ。しかし、閣僚の辞任というのは、もうこういうことですから私自身でもう辞めますという辞め方、それから罷免という辞め方、そして、実質的には罷免だけれども、いよいよそういう措置を取られるのは嫌だから嫌々辞表を出すというやり方、いろいろあると思うんで

す、政治ですから。しかし、今度の田中外務大臣の場合には、これはやっぱり罷免ですよ、首にしたいんですよ。どうですか、総理。

○内閣総理大臣(小泉純一郎君) これは、お互いのやり取り、ああ言ったこと言つたということ、は、名譽の問題にもかかわりますので本来は差し控えないんですが、はっきりしていることは、この事態正常化のために協力していただけないかと、分かりましたということで、後の手続は私人事務当局に任せたくてございます。

○平野貞夫君 言つた言わぬの話は私はしませんが。しかし、手続論として、こういう場合に辞表を出さなかつたら、今朝の持ち回り閣議で田中さんにサインしてもらおうという行為は必要なんじゃないですか、官房長官。

○国務大臣(福田康夫君) 先ほど申しましたように、十一時五十分の会話において了解をされた、合意がなされた、こういうように、これが事実でございます。そして、その後のことにつきましては、これは今の持ち回り閣議云々、これは通常お辞めになる方はサイン、署名をされないということをやっているわけでございますので、何ら問題ないというふうに理解しております。

○平野貞夫君 罷免された閣僚がその持ち回り閣議に、認証のための閣議にサインをしないというのは、これは分かりません。しかし、辞表を出さずに口頭で何かいろいろあつたけれども、やはりそれはやっぱり文書による確認が必要だと思えます。辞表を出さない場合には、これは法律要件として持ち回り閣議の閣僚の署名には必ずじゃないですか。

○政府特別補佐人(津野修君) お答えいたしません。こういった事例が、前例があつたかどうかとい

いますのは、私どもも詳細に従来の慣例を調べたわけでございますので、現時点では私は承知しておりませんので、お答えできません。

それから、持ち回り閣議の場合あるいは閣議の通常の場合でも同様でございますけれども、利害関係者が、例えば今回のようなケースがある場合に、そういう人その会議の場においてその人の、何といひますか、意思を、意思といひますか、そういうことの決定にサインをさせるということ、合議体の一般原則といひましてそういうことはされてないというのが原則でございます。従来から閣議はそのような慣行として取り扱っているわけでございます。

○平野貞夫君 今日でなくてもいいですから、事例があるかどうかということについて調査して回答してください。

○政府特別補佐人(津野修君) それは後で調査させていただきます。

○平野貞夫君 持ち時間が少のうございますので、次に移ります。

田中外務大臣と外務省の確執というのの本質は、田中さんが就任のときに外務省の機密費、二十億近い金額と言われていますが、これを内閣に上納しているということに強い関心を持ったこと、ここに僕は問題のポイントがあると思えます。

○平野貞夫君 今までも、小泉内閣になつてからもないということでございますね。もう一回。

○国務大臣(福田康夫君) 過去何度も御説明しているとおりでございます。

○平野貞夫君 私、小泉政治の本質というのについてちよつと触れたいと思うんですが、面白いですね。断固やる、熱慮する、これで良かった、これが小泉政治のこの一年のノウハウ。これは政治の二重構造です。言わばあらゆる問題が権力の中の共食い現象になつていっているんですよ、小泉政治は。だから改革も景気も良くならないんです。

小泉総理の政治の手法と選択の、政策の選択が誤つていっていることを申し上げて、次に譲ります。

○委員長(真鍋賢二君) 関連質疑を許します。西川きよし君。

○西川きよし君 どうぞよろしくお願いいたします。

早朝より御苦勞と申します。

言つたか言わないかという、もう総理も嫌になるということをおっしゃつておられました。このテレビをのぞいておられる全国の方々も本当に嫌になつておられると思います。もう少し我々に関係のあるお話もしてくれないかという方もたくさんいらっしゃると思います。医療だとか年金だとか福祉だとかということ、私は最初の公約どおり、今日もその点について質問をしてみたいと思つてます。

今から四年前のことですが、小泉総理大臣が厚生大臣のときですけれども、家族について私は質問をいたしました。そのときに総理は、西川さん、家族というものは人間にとって一番大事なものだとおっしゃいました。そして、余り家族の問題に干渉してはならないけれども、側面から家族の連帯を強めていくような環境の整備が必要だと、こうおっしゃいました。今も変わりはございませんでしょうか。一言御感想を下さい。

○内閣総理大臣(小泉純一郎君) 家族のきずなをしつかりするということは、人間生きていく上に